

「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業

～形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通して～

I はじめに

現在の生徒が社会で活躍する 2050 年頃には、協調と競争をする国際的な環境の中で、多文化・多言語・多民族の人たちが身を置いていると予想される。そうした中で、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えると考えられる。文部科学省の英語教育の在り方に関する有識者会議では、グローバル化の進展の中で、「国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠」¹⁾であるといわれている。英語力の中でも、特に外国語（英語）によるコミュニケーション能力の育成が求められている。学習指導要領解説では「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」²⁾と述べられている。併せて、OECD による OECD Future of Education and Skills 2030 や学習指導要領で言及されているように、学習における生徒の主体性についても、外国語によるコミュニケーション能力の育成と関連付けて考えていく必要がある。この先社会はより予測困難な時代になり、英語を聞いて理解したり、質問に答えたりするだけの表面上のコミュニケーション能力ではなく、英語を使って未知の状況に対応し、自分事として考えて諸問題を解決することができるコミュニケーション能力^{注1)}の育成が求められている。そのために、中学校の3年間では、まずは与えられた単元での課題に対して、主体性を発揮して課題を達成できるようにコミュニケーション能力を育てていく必要があると考える。課題を与えた際、現時点での自分の力だけで課題に取り組ませることで、課題達成の難しさを自覚させ、自分に不足していることや今後学ぶべきことについて気付かせる。そうすることで、個々の生徒が単元での学びに対して問題意識をもって、主体性を発揮することにつながると考える。加えて、他の生徒と意見交流をして課題達成に向けて工夫を考えさせることで、より効果的にコミュニケーション能力を育成できると考える。

コミュニケーション能力の育成に関して、教科書で取り扱われている文法事項をそのまま生徒に提示し、繰り返し練習させて覚えさせ、フレーズや例文をそのまま使って会話やスピーチをさせるといった、いわゆる PPP^{注2)}型の指導の改善が近年求められている。しかし、指導のしやすさから、未だに PPP 型の指導を行っている授業は少なくない状況である。この PPP 型の指導では、この先求められるようなコミュニケーション能力を育てることは難しいと考える。松村昌紀はこの PPP 型の指導による結果として、「英語という言語は学習者にとって、現実から離れた誰かの言葉、自分とは別の認識空間に存在する言葉として、いわば『真空中に浮かんで』存在することになる」³⁾と述べている。鈴木渉が「フォーカス・オン・フォーム^{注3)}が目指すのは、(中略) 真のコミュニケーション場面で活用できる知識の習得である」⁴⁾と述べているように、本校英語科では、PPP 型の指導のような形式重視の教授法と、意味重視の教授法のバランスを取った教授法である、フォーカス・オン・フォームの考え方を基に授業を進めている。授業の中で実際の目的・場面・状況を意識させ、表現を工夫させることや、文法事項が実際の目的・場面・状況でどのように活用できるかを理解した上で使用させることを通して、コミュニケーション能力を育てていく必要があると考える。

そこで英語科では、外国語によるコミュニケーション能力について改めて捉え直し、外国語によるコミュニケーション能力とは、英語の音声や文字を用いて、情報や考え、思いを理解したり、意図した通りに表現したり、伝え合ったりする能力であると定義した。コミュニケーション能力に関して、フォーカス・オン・フォームを生かした授業づくりを提案している和泉伸一は、言語習得には「言語形式」、「意味内容」、「言語機能」（以下、形式、意味、機能）の3要素が常に関わっているとしている。本校英語科では、形式をある語句やフレーズの発音、語彙、文法、綴りなどといった形式的な要素、意味はある語句やフレーズが日本語でどのような意味を伝えているのかという内容的な要素、機能はある語句やフレーズをどのような時に使用するのか、使用したときにどのような働きがあるかという要素であると定義する。和泉は「コミュニケーション能力とは、この3要素を効果的に結び付けていける能力であり、それゆえに、言語習得の鍵も、これら3要素の密接な結びつきを学んでいくことにありと捉えることができる」⁵⁾と述べている。3要素を結びつけるとは、それぞれの要素をバラバラに捉えるのではなく、三つで一つのものであるとまとめて捉えて考えることである。一つでも要素が欠け、結びついていない状態の英語や、とりわけ機能の結びつきが弱い英語が、前述のPPP型の指導の結果であり、表面上だけのコミュニケーション能力の育成につながってしまうものであると考える。

さらに、和泉は、形式・意味・機能の結びつきがなく、実生活とのつながりのない英語を「死んだ英語」と呼び、「コンテキストがあると、英語が生きてくる。コンテキストと意味内容は、『死んだ英語』を『生きた英語』に変えるためには必須なのである」⁶⁾と述べている。ここでいうコンテキストとは、コミュニケーションの目的・場面・状況のことである。英語を形式や意味だけ捉えて受動的に学び、いざ表現しようとしても、実際のコミュニケーションでは使えない「死んだ英語」になってしまう。コミュニケーションの目的・場面・状況を意識し、英語のもつ形式・意味・機能とその結びつきに基づいて英語で表現したとき、それは「生きた英語」になると言える。形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じた英語を用いることが、本校英語科における深い学びであると考え。そして、この深い学びを達成した姿が「生きた英語」でコミュニケーションを図る姿であると考え。

「生きた英語」を習得するために、授業では、実際のコミュニケーションの目的・場面・状況を意識させられるよう、オーセンティックな題材を活用し、課題の設定を具体的に行う。この課題の設定が、学びの文脈をつくり出し、形式・意味・機能を結びつけるためにも必須なものである。また、個々の単語や表現に関して、形式だけの暗記や反復練習にならないように、実際にコミュニケーションの中で使用させられるよう言語活動を工夫し、使用させる中で、形式・意味・機能を理解し結びつけられるようにしていく。また、その際には文章を読んで話し合ったり、聞いたことを基に意見を述べたりと、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能を効果的に関連付ける統合的な言語活動を行い、実際の英語使用場面をより意識させる。これらのような活動を通して、「生きた英語」を習得できるようにしていく。

以上のことから、英語科では、研究主題を「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業ー形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通してー」と設定し、研究に取り組むこととした。

Ⅱ 研究の概要

1 英語科で目指す生徒像

英語科では、目指す生徒像を以下のように設定し、研究に取り組むこととした。

「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒

2 育みたい資質・能力

英語科における目指す生徒像に近づけるために、次の資質・能力を育みたいと考えている。

形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて、表現を工夫して伝えることができる力

英語のもつ形式・意味・機能を結びつけるためには、それぞれの要素を理解した上で、実際に英語を使用する中で、3要素が結びついた表現の効果を実感させることが重要である。この結びつきに基づき、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、伝えたいことを伝えるためにより適切な表現を選択したり組み合わせたりすることが、表現の工夫である。また、3要素が結びついた表現を目的・場面・状況に応じてどのように組み合わせるかといった構成面での表現の工夫も、コミュニケーションにおいて不可欠である。単元の中で、英語のもつ形式・意味・機能とその結びつきの学習と、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて表現を工夫する活動を行うことを通して、この資質・能力は生まれ、「生きた英語」でコミュニケーションを図ることにつながると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

資質・能力を育むためには、課題に対する問題意識をもたせて、主体性を発揮させることが重要である。本校英語科における主体性を発揮した姿とは「課題達成のために自分に足りない英語表現等を問題として見出し、単元の中で問題を解決しようとしている姿」と定義する。また、資質・能力につながる単元での学びを深めるためには、主体性を発揮した生徒の学習が学びの文脈に沿うように学習を調整させることも必須である。そこで英語科では、上記の二つを意識して、単元構成や学習内容に関わる手立てと、生徒が実際に記録する学習プリント（後掲資料1 Performance Checker）に関する手立てを設定する。

(1) 課題と Section（場）の設定

ア 課題について

単元全体を通しての課題を提示する。これは総論における「課題」と同義である。ただし、英語科における課題は、単元全体に学びの文脈をつくり出すものであると同時に、単元で学ぶ表現の形式・意味・機能を結びつける役割を果たせるように設定する。加えて、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識させられるよう、前述の通りオーセンティックな題材とする。なお、英語科におけるオーセンティックな題材とは、生徒の想像が及ぶ範囲の現実味のある目的・場面・状況で、生徒自身の立場で考えられる題材とする。

イ Section（場）について

単元の基本的な学習の流れとして、Training Section（以下 TS）→Advanced Section（以下 AS）→Performance Section（以下 PS）→Reflecting Section（以下 RS）の四つの Section を

設定し、学習活動を整理して単元を進める。課題の提示、課題に対する問題の設定、問題解決、課題の達成とその振り返りを順序立てて行わせることで生徒が問題意識をもつことができるようにし、主体性を最大限発揮できるようにする。各 Section における活動は次の通りである。

Training Section 【形式・意味・機能とその結びつきの基礎を学ぶ】

- ・課題を提示し、パフォーマンステストと同様、または似た形式でやり取りやスピーチ、ライティングを行わせる。^{注4)}
- ・学習の見通しをもたせるために Performance Checker (後述) で単元の目標を提示し、課題達成に向けた個人的な問題を設定させる。
- ・教科書を活用し、課題達成に必要な知識を確認したり、知識を実際の場面で使えるようにするための言語活動に取り組みせたりする。なお、その際に、形式・意味・機能のそれぞれの要素を意識させられるよう工夫する。
- ・既習事項の復習や、教科書の場面に関連したスピーチややり取りなどの言語活動に取り組みさせることで、限定的な場面での形式・意味・機能の結びつきを実感させる。
- ・AS や PS で活用できるような表現の練習や準備に取り組みさせる。
- ・学んだことは、Performance Checker に記録させる。

Advanced Section 【目的・場面・状況を意識した上で、形式・意味・機能を整理する】

- ・パフォーマンステストと同様、または似た形式でやり取りやスピーチ、ライティングを行い、課題達成に向けてそれまでに学んだことをどのようにいかすかを考えさせる。
- ・グループ活動や教師のモデルを通して、課題達成に向けて有効な形式・意味・機能とその結びつき、それらに基づいた表現の工夫について、グループや学級で意見交流や意見共有をさせる。^{注5)} この活動を通して、TS の時よりも汎用性のある形式・意味・機能の結びつきを実感させる。
- ・Performance Checker を活用し、パフォーマンステストで個人としてどのような表現の工夫をすればよいかを考えさせる。

Performance Section 【実際に「生きた英語」を用いる】

- ・課題達成のためのパフォーマンステストを行う。スピーチとやり取りの様子は ICT 機器で録画させる。

Reflecting Section 【「生きた英語」を振り返り、実際のコミュニケーションで使えるものにする】

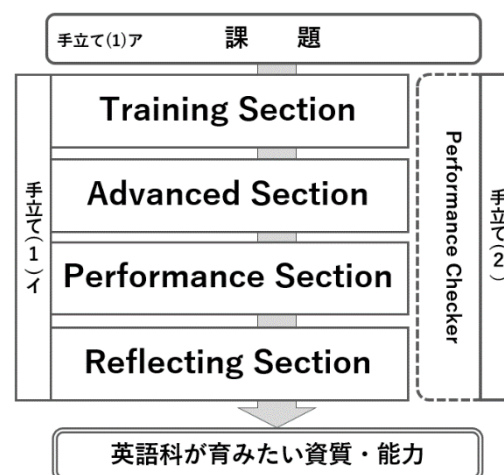
- ・パフォーマンステストの中での形式・意味・機能とその結びつきを中心とした振り返る際の視点を確認させる。また、自身の設定した問題を改めて確認させる。
- ・単元最初とパフォーマンステストでの自分の様子を見返させ、課題の達成ができたか、形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて表現を工夫することを通して「生きた英語」でコミュニケーションを図ることができたかを Performance Checker を使って振り返らせる。
- ・個別に設定した問題についても解決できたか、どのように解決したかを Performance Checker を使って振り返らせる。
- ・Performance Checker を使って、単元の学習方法について振り返らせる。

(2) Performance Checker の記録

生徒が単元を通して記録をする学習プリントとして、Performance Checker を作成する。Performance Checker には、単元を通した課題と単元目標を明記することで、単元の初めに単元

を通した学びの見通しをもつことができるようにさせる。また、単元最初のパフォーマンス後に、課題達成に向けて解決すべき問題を記述させることで、各個人の問題を明確にし、学習の方向性を定めさせる。これらにより、単元全体を通して主体性を発揮させるようにする。なお、この際の問題は、単元での学びを意識させるため、単元の課題に対して、形式・意味・機能の3要素と関わる形で設定をさせる。そうすることで、単元での学びの文脈に沿わせる。具体的には、TSの段階から、毎時間の授業で学んだことを形式・意味・機能とその結びつきが分かるように記録させ、それらを明示的に振り返ることができるようにする。ASの場面で、意見交流や意見共有して学んだことを記録させることで、課題達成のための表現の工夫を明確に考えられるようにする。そして、PSでパフォーマンステストをする前に、それまで学んだことのまとめとして、課題を達成するために重要だと考える形式・意味・機能が結びつき、目的・場面・状況に応じた表現の工夫を記述させる。そして、パフォーマンステスト後のRSの場面で、単元最初とパフォーマンステストの様子を比べさせ、その変化を成長として記録させる。最後に、単元を通して「生きた英語」でコミュニケーションを図ることができたかについて自己評価させ、どの学習が有効であったか、もしくはなぜ身に付けることができなかったかに関して記述させて振り返らせる。

以上のように、資質・能力を育むための二つの手立てを表したものが右図となる。



【図1 資質・能力を育む手立て】

4 資質・能力が育まれたかの評価について

「生きた英語」として形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて表現を工夫できたかを、Performance Checkerの記録から見取る。そして、記録した表現の工夫を実際にパフォーマンステストで用いることができたか、つまり、「生きた英語」として使うことができていたかを、パフォーマンステストの様子から見取る。この二つを通して、手立てが有効であったかを検証する。

5 研究の経緯

1年次では、資質・能力を育む手立てとして、課題とSection(場)の設定、Performance Checkerの記録が有効であるかを検証した。

一つ目の手立てについては、単元の初めに実際に課題に取り組ませたことで、多くの生徒が課題の目的・場面・状況を意識して、自分自身の問題を設定していた。このことから、課題の設定によって、主体性を発揮させることができたと考える。そして、その後続くSection(場)の設定により、TSにおいて単元の中でねらいとする表現の形式・意味・機能とその結びつきを理解させ、AS、PSにおいて目的・場面・状況に応じて単元の中でねらいとする表現の使用を促すことができた。

一方で、課題の設定に関して、単元の中でねらいとする表現の使用を促そうとするあまり、現実味のない場面や状況になってしまい、その結果、単元の中でねらいとする表現の必要性を感じさせにくい課題になってしまうことがあった。今後は、単元の中でねらいとする表現の必要性を感じさせられるように、既に目的・場面・状況のいずれかを含んでいる課題の設定を工夫する必要がある。

二つ目の手立てについては、Performance Checkerに単元を通した自分自身の問題を設定させた。これにより、AS、PSにおいて、課題の目的・場面・状況に応じて自分が記録してきたものの中から必要な表現を選び、パフォーマンスで使おうとしていたことから、自らの学習を調整させ、学んだこ

との中から表現の工夫を考えさせることができた。

一方で、Performance Checker には、課題達成に必要な表現として、学習した順に形式・意味・機能が記述されていたことから、学んだ知識がどのように関連しているのかが捉えにくく、知識の精緻化が起こりにくいと考え。課題達成に必要な表現について、機能を中心に分類してまとめさせることで、知識を精緻化させ、課題の目的・場面・状況とつながりやすくしていく。

6 2年次のねらい

1年次の成果と課題を基に、学びの文脈をつくるための効果的な課題の設定の見直しと、単元の知識を精緻化するための活動内容の工夫し、資質・能力を育むための手立てを確立する。

研究1年次の成果と課題を踏まえ、単元の中でねらいとする表現の必要性を感じさせ、目的・場面・状況とつながりやすくするために、2年次のねらいを設定する。

まず、学びの文脈をつくるために、単元の中でねらいとする表現が、提示された課題の目的・場面・状況の中で必要となるように課題の内容を検討する。また、課題を提示する際は、「課題を達成するために大切にしたいこと」を、目的・場面・状況を踏まえて考えさせ、共有させる。その後、自分自身の問題を設定させる。このようにすることで、課題によって学びの文脈をつくること、資質・能力を育むことに有効だったかどうか、Performance Checker の記述やパフォーマンステストの様子から見取っていく。

次に、単元の知識を精緻化するために、学習した表現を機能を中心に分類してまとめさせる。具体的には、課題の目的・場面・状況を踏まえて考えさせた「課題を達成するために大切なこと」を Performance Checker に記述させ、学んだ表現を機能を中心に分類させて使用させる。このようにすることで、単元の知識を精緻化することが、資質・能力を育むことに有効だったかどうか、コミュニケーション活動やパフォーマンステストの様子から見取っていく。

注1) 表面上のコミュニケーション能力との大きな違いは、その場の目的・場面・状況に応じ、自分の考えや思いに即した英語を用いて、相手とコミュニケーションを図ることができるかという点であると考え。表面上のコミュニケーション能力では、自分の考えや思いが適切に伝わらなかったり、相手に違和感を抱かせてしまったりすることが考えられる。

注2) Presentation (提示)、Practice (練習)、Production (表出) の略で、特定の文法事項を明示的に学ばせた上で、正確に使用させることに重点を置いた教授法である。PPP型の指導で学んだ表現は、授業内で用意された限定的な場面での使用はできるが、実際の場面での応用が難しいと考える。

注3) 意味の伝達をする中で、学習者の注意が言語表現に向けられることをねらいとした教授法である。本校英語科では、対象となる文法事項が自然な形で使用される現実の場面に即した課題の設定を行い、その場面の中でコミュニケーションを図るようさせ、意味の伝達と表現に対する注目の両立を図ることを目指している。

注4) 本校英語科では、共通の課題に対して、各々の差に応じて問題を設定し解決していくことを、個に応じた学びとして考え、個別最適な学びと捉えている。

注5) 本校英語科では、課題達成に向けてグループや学級で意見を共有したり、意見を交わし合ったりする際に、協働的な学びが起こると考えている。

引用文献

- 1) 文部科学省英語教育の在り方に関する有識者会議『今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』、2014年
- 2) 文部科学省『中学校指導要領解説外国語編』開隆堂、2018年、5ページ

英語科

- 3) 松村昌紀編『タスクベースの英語指導－TBLT の理解と実践』大修館書店、2017 年、11 ページ
- 4) 鈴木渉編『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店、2017 年、187 ページ
- 5) 和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店、2009 年、138 ページ
- 6) 和泉伸一『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業 生徒の主体性を伸ばす授業の提案』アルク、2016 年、16 ページ

参考文献

和泉伸一『第 2 言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク、2016 年

鈴木渉・佐久間康之・寺澤孝文『外国語学習での暗示的・明示的知識の役割とは何か』大修館書店、2021 年